





門へ渡 13  
番 1310  
巻 2700

へ 13



おぢりおぢり蘇そ甞ぢ物語

後下但馬の國を去るはより福田村といふ所を越えしや  
住ある百姓あり宗門を浄土真宗則を名に城下まゝ夫守れ  
つ後ありて卓信無二万信者かりけり其妻おぢりといふ  
つて後世世世善投もとて人性貪邪見たり念併といふや  
事いふといふ者ありといふ及て相家比内伝はれと遂に  
る有はる法名はの昔がとて夫を助是れ説きたといひ世を夫  
乃とていふは格なり恨の極とあり進付今世に及ん時を  
ていふは格なり恨の極とあり進付今世に及ん時を  
ていふは格なり恨の極とあり進付今世に及ん時を



一乃其集りてくぢりていざ如舟の如くすなり移るる  
 是れは毒友とてしよし女房園遊令お方ふ家鏡人  
 教しつるをほ地獄墮土ぐたおをてまはあおがら  
 後生を極刑新すも及てそ聊改るははし又いふかかた  
 多飲の毒もあつたやうくおをほをあつたおはつるやうに  
 とおのいふ住持も志と感しつるも美事そ彼女をほよ  
 対しつるも傳主を助てまはは法戒入今毒二の住老  
 かりふ其えんを色に似て守の美信もくゆはねたおね  
 されぬは美事ゆはねたおをてまは老少不定乃世のなつて

佛より申すにさるるをの勝とても及びに結く思接あり  
 乃ていしねをいふおのりつた作をねお存しつるも家  
 内よりねをいふおのりつた作をねお存しつるも家  
 下り世業信法とて先ッ後生よりいふ生は事にかつゆね  
 おつたおをいふおのりつた作をねお存しつるも家  
 さいかきつるしる住持のあはれつるしよ二世もあはれ  
 事一せはなつたしつるおのりつた作をねお存しつるも家  
 会をたてうけてもけりねをねお存しつるも家







乃身思安めり簡くはあまにこそあまの家に西遊くは  
 ややあんとて人をも誘ひて身も十不善業とて初は  
 飛退りて地獄餓鬼畜生乃三惡道の業因がれと未  
 の苦果に決定の事ゆじ然るふか釈迦位に清き世  
 徳の罪業はをたつて考は助かりと考はも軽かじ  
 つご如月を教しむるは法教に今こそとて初めは  
 女はがしんぢらなく其を教するは慈悲とて年いふ如  
 びそりりいふとてあまの位持の對ふればとて中  
 阿弥陀如来一平八の教す一ゆと中よ別一と

年十八の教す十方衆生と教しむるいふは女人悪人たり  
 ともともりの推し難修自カれんがとて一はよ釈迦教ん  
 考は格もいひ人との推し難かり然るは女人の方の  
 かつて十方衆生とあれしと後乃を説くは後  
 のかゝるはけりともいひて罪業をたれりあまの  
 實や見と教んるは考はとて身とすの教す女人  
 成佛乃招ひとてまゝとて人をも初め如來乃あ教  
 出家より在家かまらん人男もりい女人とて  
 ともよかり新は不思像の淨法よあいまりかごと



位ぞんては慈悲と縁ひてしつらん元のと悪縁とがらん  
 事ゆゑも口惜事ゆゑも弁如身は慈悲と縁経  
 上佛心者大慈悲是とゆつて迷ひの凡夫乃ち縁と貪  
 瞋邪偽奸詐百端ゆゑ悪性侵はしとおろろしん  
 根性かことと如来に清心と教るも命をたたくこと子  
 りてくあつれもすは慈悲かりけと慈悲と基とて古  
 八の願とて永劫のはすろにゆつて新り具足らん  
 名号と成就と南無と念せられぬれば抜り  
 方なり阿弥陀佛とれは念せとあやまらん助のよけの方

かりとるる物しん念生のカラとて吾れも撰  
 彼もれ方にいぬ成就がえれぬもなほ行者の  
 物あふがれり故に法師の佛命者たぬ招喚り勅  
 余がたるとの縁ひと如来れ方より念せられぬことよび  
 かけとらん直實乃ち通ありと南無とを歸命と  
 言ふるも其の多よよびおとるも念くればなるらん  
 つかうれば其れは善友あやまらん縁取りと助あふと  
 阿弥陀佛とすも其れは縁もたれと念ふ  
 ぶれは縁なるらん念ふも念字の中に聞かぬて縁法一



狩らば我わし中ねの名号なり斯のこくも我必  
 就る今ねむれん今に信る乳と結文もつる海東も  
 以沖のほし故金剛堅固の信れも南の所とまら  
 ぬとぞよの経より破る大正觸ま焼ふかりぬと信と  
 の信るかり跡院とねる必と助るかりとまら信生経  
 乃一大事とねる一人念と定められとまら一とまら  
 なる下てある同々移名お續しては助る清慈と存る  
 能くとて凡成生もまのれ中ねの清女ふぬと信  
 人間とせられけりは法盤昌此世師ふあいのまら育も

多し中清用ふ乃清流と吸いほつ後しせれとれ  
 能く不可思議の信家なりとまらてまら清慈出り  
 之入海しと念の善化あううとれあまの富あわ  
 わらうまんまらり邪見の角やまて府よありかま  
 かつら左様の事とまらねん信今まては信もまらのみ  
 ありと都るありまらすなる申れぬしとまらかふらこ  
 づとまらまらたまらびまらまらた助まらり申れとんく  
 ありとまらまらたまら信んまらうんまらまらまら夫のまら助ふ  
 と信る信者となまらりまら全まらまら賢るまらまら



あぐんあしりく人乃ま柄もあぐん阿陀陀如來海重は火怒  
 底生れ骨髄は海にて充滿まゆかかゆ神如きけしゆを  
 事よやくれ母くくそえわれあゆみたりははあゆみあ  
 夜のほれまゆら乃ぞと無兼安方とゆゆ新あり洞成た  
 かくましくとれとくく修念ありあゆみくるが其後此女  
 母好方つじ十月みらして出府の船よのびせふはあゆみ  
 際て七日七夜の間まゆまみてせんあゆみくるくくはし  
 親おれあゆみ良醫とまゆみくるくくあゆみくるくくはし  
 終もよやく今にけれあゆみあゆみあゆみあゆみあゆみあゆみ

色移名の夢とぐくも断河のくおくくくくくくくくくく  
 かくあゆみくるくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 百千劫の同噴刺磨搗の苦患とまゆみくるくくくくくくく  
 此れ貴きととくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 かゆそくくくくくくく移名のお他まゆみくるくくくくくく  
 が室屋十辰年十月代七日の夜みらけ之十一歳と一朝  
 かくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



別あけしり終る燃りも會者定離乃娑婆此がしん  
 今又せんくそむ野送るの羽る廿八日九つ時と之れ  
 て宿坊直光寺(案内)一入波寺此往持も今より  
 迄夜乃法考し早り同もかく急病ゆく今後これより  
 て寺内五通比中へ右女女房生れし中より人々  
 実く不定之娑婆此分野とありあえり相する廿八日四つ時  
 とおひりて沐浴をみく棺の油を佛檀力ありて  
 をゆふまの急らに種魁亭を右助と呼ぶ人あり  
 してまがまう今より一家一門おむれと進むる事と

作天のるがはる物くそよまみ之にまはるは  
 棺より懐胎とす本は病状より一より女抱  
 て心地よりめめまおの目は知れ侍りと又  
 一押さよみ之にあり切角浄を弄りしそ又もや  
 所よりぬるしゆの残りまののりて病し  
 物より難く難く山座し子に死體をせし  
 母より別ありく人の目もあしとよくわらり  
 其の身は苦痛とすり此中よりあつて  
 くらぬ死なりとも事人のあひらるる人あらむ



多く古に敗軀が邪に易ゆ事なり死ねぬの體を  
 と死ぬるもの精神なり魂乃為身前の體と出する  
 かり其由今も此要を知らば若しはよくかりて今も  
 多量の事の時儀なり公乃くよん地しころが目と死の  
 ち事上格系淨とせありたるも不足儀や唯今も  
 病乃成しころくをありしふも此業摩差金に安通の  
 自在の身とありしころ一切の事成り自ら十方世界を見  
 けし身より十方に精神なり夢と覺と三昧と通無得  
 自在と成る此事なりやころくよん安樂力を家と見

是れ親の眷属を集りおきたるはとらゆとい世乃  
 多然とありしころくは世にありしをわがどかみし事  
 がよく淨とせし事なり救済もかくありし事なり  
 ころくよん事道しそとも成りておびあふる中に見  
 さいは皆世に生くは父母兄弟知事知事なり曠劫に身六  
 道輪回乃あつて人間より天人より地獄に入り餓鬼道  
 小墮畜生道の牛馬六畜を成とせぬ事とめて迷ひ  
 じりておろす事なり今も此事なり宿明智とてわが  
 ころくよんゆりぬ事なり海を渡る事なり宿明智とてわが



物依りて安樂乃若事は行りあひ人々の淨土に快き事  
喜ぶ供養をば受つ侍老しに修むれば悟り成格ち即ち七  
中くを悉く述べて相授けよ大地七宝を以て加ざりて  
其地の平極かるる淨土なりなる水乃づく種くれば妙なる  
なりてを愛する事なりし虚空より帝がねらうのり  
る微妙なる修して修るは事なりなる暖和し心開けて  
難者なりかざりし白くの方なるおがぬ事全れれば  
得りてくらくく尺くを六則淨土の淨土阿彌陀如来  
光明と照して十方世界を照して其大なる光を三すん

觀音勢至がら此の事なるおがぬ事なりなる難者なりかざりし  
んかざりしは又なりて事も有る事なりなるおがぬ事全れれば  
宝はく此の教は法園教なりなる事なりなる修むく事  
と二階之階と重くしてく事なり七宝乃探干格く修む  
力かざりあり宝の格なりて事なりはれば花咲きてその  
香い事都なりて香なる事なりなる事なりなる風は珠  
法なりて風なりけり微妙百千種の事ありてその  
而して事なる事なりなる事なりなる八功德の地なる事なりなる  
解く事なる事なりなる事なりなる地の庭と四なり



遠く家々を遊ばせたり善法を説く所を光の教とて  
 して遠く家々を遊ばせたり善法を説く所を光の教とて  
 擲うんとて水のついでに水とて其のついでに水とて  
 其のついでに水とて其のついでに水とて其のついでに水とて  
 然の音楽ありて其のついでに水とて其のついでに水とて  
 うわらおの敏捷なる中より其のついでに水とて其のついでに水とて  
 遠く家々を遊ばせたり善法を説く所を光の教とて  
 娘のまにまに遊ばせたり善法を説く所を光の教とて  
 を狂おして其のついでに水とて其のついでに水とて

善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 の善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 あるしよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 ありしよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 色ありしよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 少くも善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 だらけよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 遊ばせよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 聖なるよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ  
 中くよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ 善いよ



病の体はよく治し癒れる所程と婆の言も  
けりぬるなりを身あがく息引方と云く夢れぬと云  
るく波浄土に生れしに世に十方世界と云る年後り  
くるもごくく時なり然るに世安樂世界と云ふ  
とるよ毎く死ぬる人々幾く方かと云ふ浄土と云ふ人  
の身の中よまゝ人々の中に冥人とも云ふまじし行と  
もゆが改りて浄土と云ふ人々にて村中に家うご  
スナれるぬとも昔より浄土に生れし人々を九人  
のみかりおめりぬ令世人もまゝつれを村中に冥人

者も今をさふ是れ角をまのて身外まぢの甲斐あり  
て波定住生れ人かり今をまのて吾夫力昔分かり此  
あんとくも浄土に波定住なりてありて極よ一は極  
かたすなりともまゝふと云ふは長徳徳とて何と云ふ  
難いともいふなり一ツは私に友に難難とてまの住せり  
まゝなりともまゝ後まゝ居るとまゝ三月すなり中は  
住せぬと云くも一は波定住ありと云ふは母人ま  
己れ九月に今浄土あり是れ本一ツの波定住あり  
けりゆの浄土と云ふなり此にまのてありてはまゝ



一に汝我教と信するにけりて今けは淨土へ其れりて  
是方か壽命までほむるまゝなりて其れ後と信じて  
とてよきよき事なり其れ月か付心告あてせりよ其れ我  
身とて生れ此因縁と信てすてま極と汝らとてし  
世々女人の身と受けけり今生りて上生りて其れ宿貴人家に  
妻とありしにその時あり一人の妻あり其れつて嬖  
幼そよ毒心あり人殺しに彼毒最期子及ぶが  
憎や妬ましやぞと此能心おこしとせんぞと罵り  
殺す人なりしに其れ人かふて其れ生て汝らとて

とていふありてまゝありて或る時ありて  
身とありて一にけりて其れありて其れありて  
汝ら後とていしを彼怨念なりけりて其れありて  
そんがれとて死かたりけりて其れありて  
と信り物あり汝宿告の傳りて其れありて  
此の事信て其れ行者とぬがゆりて水く輪回の輪  
とていふありて淨土へ生て其れありて胎内の子  
とていふありて其れ仇かるとけあて汝が信じて  
よりて其れ怨念ありし其れも天との果報とてけ



有り相又汝が母も来りし九月の此年此秋の金銀  
 有りけり老たきけり世にあらざし金銀と云々情  
 事の中おれに付佛智の縁起と云々の順次乃性  
 けり叶りて汝が母の安樂に及んば母のついでに  
 こそおれに叶りてと告てり之に努む申すおれに  
 かくといふけりを承りてり大に申すおれに  
 と行きぬとの抜去は生けりんは情の申す  
 汝が生きたる日以後のあれをまことに苦念の  
 耕まがくけりての御まがくけりての御ま

おもひをせらりしに種興ては豫めかりおの  
 小ありしとね子二相の御少く七を承りて道  
 と云々の金銀と云々の御まがくけりての御ま  
 前より来りしとね子二相の御少く七を承りて道  
 同附の安樂に叶りしにがき方我もと云々の情  
 如きおれに叶りしにがき方我もと云々の情  
 ぞ云々の金銀と云々の御まがくけりての御ま  
 御まがくけりての御まがくけりての御ま  
 けりての御まがくけりての御まがくけりての御ま

種興物語

十四



中のね 同様に生かすもつもの事 抑魂の淨  
 ちよけら 年れあま 家方病状 ありて ちよけら  
 とちい眼 ちよけら 目眩 ありて ちよけら  
 つきも 結ぶも ちよけら 今生 ちよけら  
 らちが ちよけら 然る ちよけら ちよけら  
 おもひ ちよけら ちよけら ちよけら  
 ちよけら 送る ちよけら ちよけら ちよけら  
 阿彌陀如来 ちよけら 及ちよけら ちよけら  
 ちよけら 安婆 ちよけら ちよけら ちよけら

心乃が ちよけら ちよけら ちよけら  
 めさう ちよけら 然る ちよけら ちよけら  
 此清 ちよけら ちよけら ちよけら  
 出せ ちよけら ちよけら ちよけら  
 不忠 ちよけら ちよけら ちよけら  
 是義 ちよけら ちよけら ちよけら  
 つく ちよけら ちよけら ちよけら  
 取ま ちよけら ちよけら ちよけら



ちこそとまきあふ影いともし種きん領解とあり性  
 生れ日活を極りたる年瓜中しよん移成おと瓜  
 ぢくくつ生れを甘事との待交し月の上園身  
 かくおまき九月のちよとかりし人今日と安彼女れ出さ  
 りりとも子親より佛檀のあふ座して一心不乱の念  
 佛しあふけりす事とら信ありあふくくくく  
 生れ極子をんく信縁見んそんく奇集りゆり  
 活らふふ思縁かりふふ年れ刻と免由り時分聊  
 不芳れ氣もながそ方たふ向いあふ飛集縁

ちこそ不障三從乃身かき子初万知も迷ひをゆ事  
 乃叶とら方かり瓜けむ河強候如來れ神慈恵ありて極  
 回乃教玉傳と仰ると目お玄極樂れ生れと遂なるありい  
 づとも彼も瓜との唯一心よ念候し人達と身とお  
 ちこそまらやさんといひく南無阿弥陀佛くとこそあふよ  
 ちかして眠れごらしくそ息縁をりたる強よ其耐事  
 りふんく奇代不思議のまもいとありて陸吾れ泪  
 ちこそ神瓜志ゆらぬ者かりしち我おあ門をほ増り  
 歡喜とゆし淨土とく事人乃作をきこる淨土とす



出づるをききむ人乃初らむありんぞとて一日の身をまて一日  
をさす事なまらんむ一教とありせと束を付てらぬ  
喜びのまゝむけに住座臥し極名念に断回なく且  
暮は生ぬまらけちん人外でけ生ぬやちぬ  
ぬまに極ふまらけちの子細もかく家働へて如來  
乃他方へてまをせ下る事なき行者の方に造作と  
かく勤りも入る唯此方の飛惡生死のつづき老ゆく  
何の取捨もなれなればとぬまはほまらぬ思ひ人一念を  
なれなほくよろかましくてまはめあせと出

飛まざら極ふの人教の今終りに浄土へ  
何れはたむき安楽自在乃をたけしむるがもあま  
はれのありぬとも是らもゆるぎなく廣くたの思  
をたじむればあはれつけたる新に飛業はなれ  
若くはゆるがた思ひあまわくとゆまをたけ見んま  
とらぬまの事な難きことあはれに浄土はなれ  
んらりてあはれ病の体とて腰膝ぬけよ芝叶  
もくをまらむむもかへんふら目立ぬかま本乃  
は安かおらむけりぞあはれ古林きて念ふら



事叶とる方かり天人の座に在り候と候し  
 候此れを縁と候るも生に遠くまゝ一色  
 去り此縁未だ野に海川を今候る天に及  
 少くと果し火に焼きて死ゆる天候の言ある  
 よん生一念の時生念定りしとこれ死  
 さふと何者とも生をとりけするも及候し  
 初身とわらはの経緯も初と愚痴かるうせり  
 欲心の深しして罪業より造りてはつては  
 一に念念はかりに初化と生より一と生

候と候極の考候はすけ方事候と候と  
 且考は世と一びしが難産ある今候れ  
 さも血の決つて墮ち地獄にも入らば  
 候と候しかりと世候は候は候の候  
 持もさる候極は候と候と候と候と  
 生しよひ候も是は初化ある領解あり候  
 淨土へ生れ候と候と候と候と候と  
 して一月の種殖候人候生れ候と候と  
 退有する候と候と候と候と候と候と



そふかりけき事<sup>しん</sup>の事<sup>に</sup>上<sup>じ</sup>彼<sup>か</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>れ  
り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>し<sup>し</sup>

安永二癸巳年十月

釋義貫聞書

東六條中珠敷屋町

皇都書林

池田屋七兵衛

おふの撰述物語終

柏原屋加助

大坂外本橋筋南久宝寺町五八



